

神奈川県横浜市には、昔は小さなため池がたくさんありました。推測ですが、これは火災があった場合に「火消し役」を果たすための備えで、先人の知恵ではないかと考えられます。それらのため池は、ギンヤンマをはじめ、かなり多くのトンボ類に発生源として利用されていました。ギンヤンマが餌を求めて、夕刻になると大挙して多くの川辺を飛翔し、「もち竿（昆虫などを捕るために、先にとりもちをつけた竹竿。現在は狩猟用としては禁止されている）」で捕獲しようと、橋の上は20～30人の子どもたちでいっぱいになりました。こんな風景が脳裏に忘れられない記憶として残っていますが、戦後はこの風景が見られなくなりました。それは、ため池が埋め立てられ宅地へと急速に変化したためです。現在では夕刻にギンヤンマのオスとメスが川辺を「大挙して飛翔する姿」はまったく見られません。

現在の自然環境は、説明するまでもなく劣悪になりつつあります。「地球の豊かなゆりかご」のなかで進化発展してきた昆虫たちは、絶滅の方向へと進んでいるのではないかと……。大きな火山噴火、緑地帯の大規模火災、感染症の蔓延など、あげたらきりがなほどの異常事態が発生している地球環境のなかで、昆虫たちはどうなっていくのでしょうか。

本書では、都市近郊の里山、里地、公園緑地に生息するチョウ、トンボ、アブ、ハチ、甲虫など、以前はどこにでもいた普通種がどの程度の割合で減少しているのかを、私が直接調査・観察し、撮影した約300種近い記録から、最近「姿を消した」か「消えつつある」昆虫44種を紹介いたします。

コラムに「クモの巣」を掲載しましたが、これは生態観察ではありません。ある日、大きなクモの巣に太陽の斜光が直接当たり、見事な色彩で光り輝いていたのです。元来、人間の目では紫外線、赤外線は見えませんが、この時にはおそらく、太陽光の全色彩がクモの巣に乱反射して驚嘆する色彩となったものと思われまふ。その美しさすばらしさを紹介したいと思い掲載しました。

